

台湾の大学入試改革と学力保証

日暮 トモ子¹⁾, 石井 光夫^{2)*}

1) 有明教育芸術短期大学, 2) 東北大学高度教養教育・学生支援機構 入試開発室

はじめに

台湾では、1990年代以降、とりわけ2000年代に高等教育の規模が拡大するとともに高等教育進学率が急速に上昇している。この背景には、2002年より台湾の「教育問題の根源」と指摘されていた、約半世紀続いた一度の試験で一生を決めてしまうような硬直化した大学入学者選抜方式を改め、受験生が興味関心や適性に応じて大学入学ルートを選択できるような制度が導入されたことがある。2002年から導入された入学者選抜方式は試験機会や選抜方法・基準の多様化を意味する「多元入学」方式と呼ばれ、従来の全土統一的な筆記試験だけでなく、大学が独自の的方法と基準で入学者を選抜する「独自選抜入学」(原語・甄選入学)が実施されることになった。ここでいう独自選抜入学は我が国の推薦・AO入試に相当する方式を指す。大改革からすでに10年を経た今日、独自選抜入学を経て大学に入学している学生の割合が大学入学者全体の約半数を占めるまでに拡大している(後掲表9)。我が国でも現在、推薦入試やAO入試の普及によって、国公私立大学の4割以上、私立大学だけでみると半数以上が推薦・AO入試による入学者で占めるようになってきている。入学者選抜ルートの多様化傾向、推薦・AO入試の拡大傾向は、台湾と日本は類似しているといえる。さらには、我が国同様、台湾でも少子化の影響から大学全入時代を迎え、定員割れの大学も存在する。そこで本論では、日本と類似の状況に置かれている台湾の入試制度改革、とりわけ独自選抜入学の動向を踏まえつつ、近年我が国で議論されている入学者選抜における学力保証の問題が台湾ではどのように捉えられているのかについて考察を試みたい。

台湾の大学入試改革については、南部(2007)、小川・南部(2008)、杉原・永田(2008)などの優れた研究の蓄積がある。石井も2007年に東アジアの入試改革について研究を行っており、その過程で台湾でも多様化を目指す入試改革が進められ、とくに大学独自選抜入試が拡大傾向にある一方で、依然として統一試験による選抜が重視されている状況がみられることを指摘した。本論ではこれらを踏まえ、さらに最新の動向を把握、整理分析する。

なお、ここでいう「学力」は高等学校の学習で身に付けるべき「基礎的な知識・技能」を意味している。2008年中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」において我が国の推薦・AO入試の多くが学生の「青田買い」に走り、学力不問の選抜になっていると指摘された問題における学力は、主としてこの「基礎的な知識・技能」を指していた(たとえば、答申32頁「今後は、各学校段階で最低限必要な知識・技能等を身に付け、若者が人生の階梯を着実に歩いていく仕組みを再構築していくことが必要である」)。2014年12月に中教審答申「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について」が公表され、学力を「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体的学習態度」の3要素からなると捉え直したうえで、入学者選抜においてもこの3要素に対する「多面的・総合的な評価」を行うべきとした。この3要素はすでに2006年学校教育法改正により規定されていたものであるが、本論では先の2008年答申の問題意識をもとにした。2014年答申にかかわらず、この「基礎的な知識・技能」を巡る学力問題はなお生きていると考えている。

*) 連絡先: 〒980-8576 仙台市青葉区川内28 東北大学高度教養教育・学生支援機構 mitsuo-ishii@m.tohoku.ac.jp

なお、本論をまとめるにあたっては、2014年3月に台湾にて実地調査を行い、教育部、大学入試センターのほか、国立台湾大学や国立台湾師範大学、さらに東呉大学や淡江大学といった私立大学において関係者から聞き取り調査を行った。

1. 大学入試制度の概要

(1) 高等教育の構造と規模

入試制度の概要を論ずるまえに、台湾の高等教育の現状について確認しておく。台湾の高等育機関は、大学（原則4年制）と専科学校（短期の高等職業教育を行う。2年制）に大別される。さらに大学は、学術研究を行う「一般大学」（原語同）と、高等職業教育を行う技術系の大学に分けられる。

学術研究を行う一般大学には、大学（原語同）、独立学院（原語同）、師範／教育大学・学院、体育学院がある。後期中等教育段階に相当する高級中学（原語同）および高級職業学校（原語同）の卒業生を受け入れている。修業年限は原則4年だが、一部の法律系・建築系の学部は5年、歯学系は6年、医学系は7年である。技術系の大学には科学技術大学（原語・科技大学）、技術学院（原語同）がある。4年制と2年制の課程があり、2年制の課程は専科学校卒業生を受け入れている。

台湾において「大学」（原語）は総合大学を、「独立学院」（原語）は単科大学を指す。以下本論では、と

くに断らないかぎり、両者を区別せず「大学」と記す。大学には、放送大学（原語・空中大学）、軍関係の大学、聖職者養成を主に行う大学もある。

表1は高等教育機関数の機関別および設置者別の内訳である。2012年の場合、一般大学は71校、技術系大学・専科学校は91校である。学生数は一般大学が50万人、技術系大学・専科学校が53万人である（いずれも大学院生を含まない）。一般大学と技術系大学・専科学校の規模はほぼ同規模であることがわかる。設置者別にみると、国公立よりも私立の数が相対的に多く、総学生数136万人のうち、国公立44万人、私立91万人と私立に在籍する学生が多い（「国立」は台湾の表記に従った）。表2は高等教育機関数の推移である。2000年以降大学が急速に拡大している。1990年以降専科学校数が減少した理由は、多くの専科学校が学生募集の獲得を目指して技術系の大学に昇格したことによる。

表3および表4は、台湾の高等教育進学率と在学率の推移を示したものである。後期中等教育段階の高級中学および高級職業学校の高等教育進学率は1990年代以降、とりわけ、2000年代に急速に伸びていることがわかる。2014年8月から高級中学段階で授業料無償化と無試験配分入学が開始された¹⁾。従来義務教育（小学校6年と中学校3年の計9年）段階の授業料のみ無償だったが、今回、高級中学3年間の計12年を無償とした（ただし高級中学は義務ではない）。さらに、中学校卒業生は基本無試験で高級中学に進学できること

表1：種類別高等教育機関数（2012）

種類	総数	一般大学				技術系大学・専科学校			軍事大学		放送大学	宗教研修学院
		大学	独立学院	師範	体育	大学	学院	専科学校	大学	学院		
国公立	64	24	0	8	3	13	3	2	7	2	2	0
私立	112	33	3	0	0	40	21	12	0	0	0	3
合計	176	57	3	8	3	53	24	14	7	2	2	3

注：公立大学は1大学のみ。他は国立大学。出典：台湾教育部『中華民国高等教育簡介2012/2013』15頁。

表2：高等教育機関数の推移

年	1950	1961	1970	1980	1990	2000	2010	2012	2013
大学（うち私立）	4 (0)	16 (9)	22 (12)	27 (13)	46 (20)	127 (78)	148 (97)	148 (97)	147 (97)
専科学校（うち私立）	3 (1)	14 (6)	70 (50)	77 (56)	75 (62)	23 (19)	15 (12)	14 (12)	14 (12)
合計（うち私立）	7 (1)	30 (15)	92 (62)	104 (69)	121 (82)	150 (97)	163 (109)	162 (109)	161 (109)

注：高等教育機関には軍事大学、放送大学、宗教研修学院を含まない。出典：台湾教育部『中華民国教育統計 民国103 (2014) 版』3～5頁。

表3：高級中学卒業者の高等教育進学率（％）

年	1975	1980	1985	1990	1995	2000	2005	2010	2012	2013
高級中学卒業者	39.80	44.64	40.19	48.58	56.58	74.77	88.44	95.24	94.75	95.50
高級職業学校卒業者	-	-	-	12.92	17.84	36.90	66.61	79.64	83.51	81.10

注：進学率は各学校卒業者に占める上級学校進学者の割合。
 出典：台湾教育部『中華民国教育統計 民国103（2014）版』62頁。

表4：高等教育在学率（％）

年	1976	1980	1985	1990	1995	2000	2005	2010	2012	2013
18-21歳人口に占める同年齢在学者の割合（純在学率）	9.97	11.07	13.88	19.36	27.79	38.70	57.42	66.71	69.71	70.41

注：在学者はすべての高等教育機関の在学者。
 出典：台湾教育部『中華民国教育統計 民国103（2014）版』57頁。

とした。こうしたことから、今後さらに高級中学卒業者の進学率は上昇するとみられる。18-21歳人口の高等教育在学率（当該年齢在学者の純在学率）も上昇しており、2013年は70%に達している。

このように、台湾の高等教育は年々その規模を拡大させており、高級中学生の進学率も上昇傾向にある。こうした状況から、台湾の高等教育はすでに同世代の過半数が進学する、いわゆるユニバーサル段階にある。

（2）現行の大学入試制度の概要

①統一的な選抜から多元的な選抜へ

台湾の大学入学者選抜は、1954年より約半世紀にわたって、複数の大学による連合試験（原語・聯合招生考試、聯考）が実施されていた。連合試験は年一回の全土規模の統一的な試験で、その成績によって志望大学が振り分けられており、大学が選抜に関与することはなかった。この選抜方式については、統一的な試験

を行うことで選抜の客観性・公平性が保証されるという肯定的評価もあるが、激しい受験競争を生じさせ、生徒の興味・関心を狭めるといった弊害も指摘されていた。

こうした状況を踏まえ、1990年代に連合試験に対する再検討が行われ、これまで大学が選抜にほとんど関与しなかった点を改善する方針が示された²⁾。具体的には、1994年より、大学教育を受けるのに必要な基本的な学力を測る「学科能力検定試験」（原語・学科能力測驗）と学校推薦による推薦入学制度が導入され、1998年には我が国の自己推薦に相当する「申請入学」（原語同）と呼ばれる選抜方式も導入された。

こうした改革方針に沿うかたちで、2002年より入学者選抜試験の多様化を意味する大学多元入学方式（原語・大学多元入学方案）が正式に実施され、連合試験が廃止されることになった。表5は台湾の大学入学者選抜の変遷を記したものである。

表5：台湾の大学入学者選抜方式の変遷

1954年	連合募集・連合試験の開始（～2002年廃止）
1994年	推薦入学の試験的实施、学科能力検定試験の開始
1998年	申請入学の試験的实施
2002年	大学多元入学方式の実施、指定科目試験の実施
2004年	推薦入学を学校推薦に、申請入学を個人申請に名称を変更し、統一的に実施
2007年	繁星計画の試験的实施
2011年	大学多元入学方式の調整、繁星推薦の開始（繁星計画と学校推薦を統合）、英語ヒアリングテストの試験的实施
2013年	大学学生募集及び入学試験調整研究プランの実施（→2015年報告書発表予定）

出典：大学入学試験センター提供資料（2014年3月）をもとに筆者作成。

②現行制度の概要

(a) 大学多元入学方式

2002年から導入された大学多元入学方式では、二つの方針が示されている。一つは「試験と学生募集の分離」である。もう一つが「多元的な入学者選抜方式の導入」である。試験と学生募集の分離については、試験は大学入試センター（原語・大学入学考試中心、1998年設置）が責任を持って実施すること、各募集単位（大学・学科）は試験実施前に学生募集要項を示すとともに、自ら定めた基準に基づき合格者を決定することができるようにした。多元的な入学者選抜方式の導入については、受験生の大学入学ルートとして推薦入試による選抜を入試制度のなかに正式に位置づけた。多元的な選抜方法の導入によって、受験競争の緩和と、試験成績のみによってではなく、興味関心や適性に基づいて進学先決定すると同時に、従来選抜に関与しなかった大学の選抜における権限を拡大するというねらいもあった。現行の入試制度もこの方式の方針に基づく。

現行の大学多元入学方式による入学者選抜試験のルートは2つに大別される。一つは、従来の統一試験の流れをくんだ「試験配分入学」(原語・考試分發入学)、もう一つは、大学が独自の方法与基準で入学者を選抜する「独自選抜入学」である。この独自選抜入学には、「繁星推薦入学」(原語同)と「個人申請入学」(原語同)に分かれている。

多元入学方式における入試実施体制は次のとおりである。各大学が会員となって構成される大学学生募集委員会連合会（原語・大学招生委員会聯合会）が、教育部の監督指導の下、大学入試の業務全般を所管する。その下に、試験配分入学については大学試験配分入学配分委員会（原語・大学考試入學分發委員會）が、独自選抜入試については大学独自選抜委員会（原語・大學甄選入學委員會）が設けられており、それぞれの学生募集業務および（各大学の基準または選抜結果に従ったコンピュータによる）合格者リスト作成を担う。大学入試センターは、これら委員会から独立した機関で、各入学者選抜試験ルートに利用される試験（学科能力検定試験、指定科目試験、英語ヒアリング試験）を実施する。

(b) 試験内容

上記多元入学方式における各選抜ルートでは、選抜において求められる試験が異なっており、受験生は各ルートに必要となる試験に参加する必要がある。

(i) 学科能力検定試験³⁾

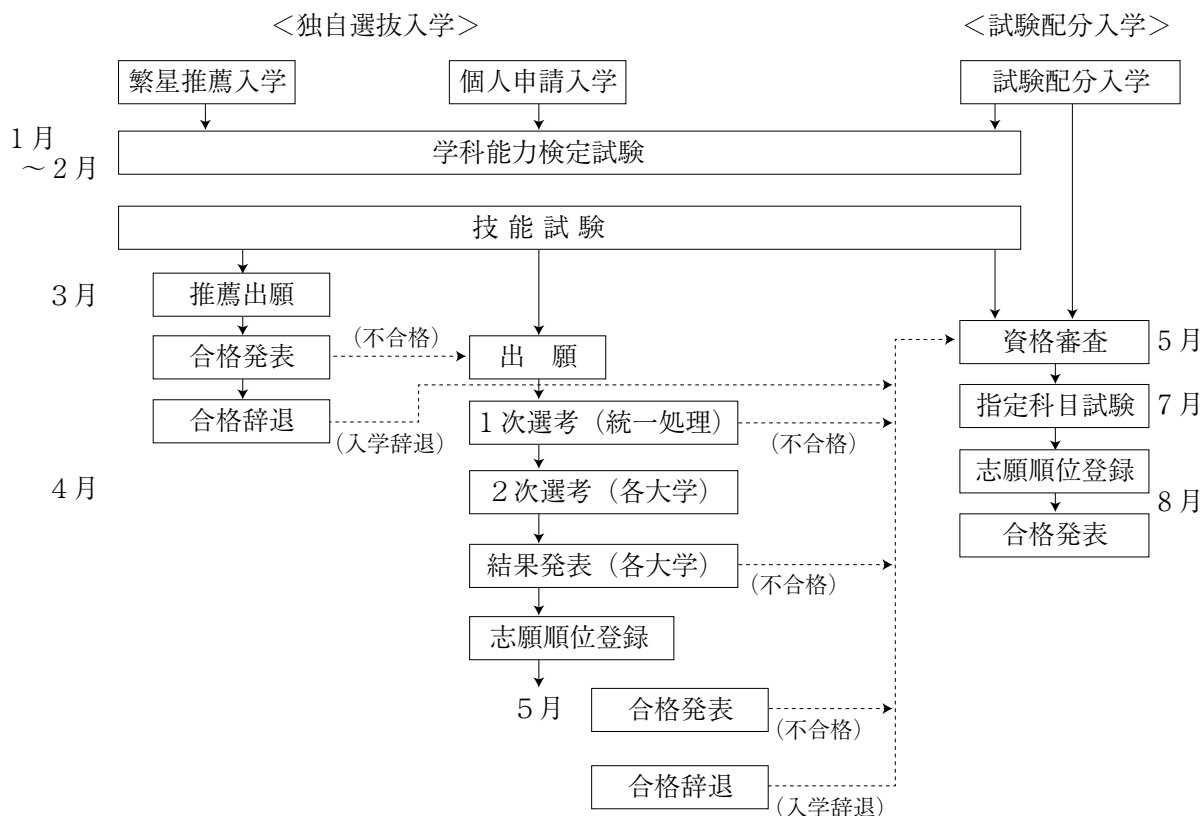
同試験は、受験生が各科目について一般的な知識を備えているかどうか、大学で学ぶ上で必要となる基本的な科目に関する能力を備えているかどうかを測定するためのものである。試験科目は、国語、英語、数学、社会、自然の5科目である。出題範囲は高級中学1年及び2年の必修課程である。答えはマークシート方式が主である。試験は毎年1回、1月下旬に実施される。各科目の成績は15段階の等級で受験生に示される。大学に対しては、受験生の成績順位を判断しやすいように、受験生の各科目及び総合点を5段階でランク分けをし（「頂標」(上位12%)、「前標」(上位25%)、「均標」(上位50%)、「後標」(上位75%)、「底標」(上位88%)の5段階。)提示している。同試験の成績は主として個人申請入学と繁星推薦入学の選抜に用いられる。

(ii) 指定科目試験（原語・指定科目考試）⁴⁾

同試験は、各大学の学科が求める能力を受験生が備えているかどうかを測定するためのものである。試験科目は国語、英語、数学(甲)、数学(乙)、化学、物理、生物、歴史、地理、公民と社会の10科目で、受験生は募集単位が定めた試験科目に従って3～6科目を選択する。出題範囲は高級中学3年の必修及び選択課程までとなっている。高級中学3年生は毎年4月～5月にかけて一律に学校を通じて集団で出願する。試験は毎年7月に3日間かけて実施される。各科目の成績は点数(100点満点)で受験生に示される。同試験の成績は試験配分入学の選抜に用いられる。

(iii) 英語ヒアリング試験（原語・高中英語聽力測驗）⁵⁾

同試験の出題範囲は高級中学1～2年の必修「英語」の内容である。毎年2回、10月と12月に実施されている。成績は等級制(A, B, C, Fの4段階)で採点



注：実線は選抜の流れを示す。

出典：大学招生委員会連合会「大学多元入学方案」<http://www.jbcrc.edu.tw/left-32-104.html>，大学入試センター提供資料をもとに筆者作成。

図1：現行の大学入学者選抜の種類と選抜の流れ

される。試験時間60分（20分説明，40分試験）である。試験実施単位は大学入試センターである。同試験の成績は，繁星推薦入学，個人申請入学，試験配分入学のいずれにも用いられる。

(iv) 技能試験（原語・術科試験）

同試験は，大学技能試験委員会連合会（原語・大学術科考試験委員会聯合会）が音楽，美術，体育の3科目の技能試験を統一的に実施するものである。技能試験の成績は，繁星推薦入学，個人申請入学，試験配分入学及び一部の大学の学科の学生募集に用いられる。

(c) 入学者選抜ルート⁶⁾

多元入学方式の下で実施されている入学者選抜ルートのそれぞれの概要は，以下のとおりである。なお，図1は現行の大学入学者選抜の種類と選抜の流れを示したものである。

(i) 繁星推薦入学

「繁星」とは「多くの星がきらめく様」を言い表した言葉であるが，この言葉通り，繁星推薦入学とは全国高級中学の優れた生徒をあまねく優れた大学に入学させるための入試である。社会的弱者に配慮し，地域間の格差を是正することを目的とする。2007年に「繁星計画」という名称で12大学において試験的に実施した結果，大学における学生の多様化，高級中学間の教育格差の是正（均質化），地域の均衡化に成果がみられたことから，2011年に大学独自選抜の一方式として繁星推薦入学を正式に位置づけ，実施対象もすべての大学に拡大したという経緯がある⁷⁾。2014年の場合，繁星推薦入学を実施している大学は67校（技術系大学を含まない），募集定員総数は1万1,270人（国立5,443人，私立5,827人）であり，2015年も1万3,357人と増えている⁸⁾。

出願資格は高級中学からの推薦が必要で，推薦を受けられるのは1大学につき1学群までとなっている。

表6：繁星推薦入学の募集内容の例（国立台湾師範大学，2014年度，一部）

国立台湾師範大学 教育学科		学科能力検定試験		配分順序項目
		科目	基準	
大学・学科番号	00201	国語 英語 数学 社会 自然 総等級	前標 前標 － 均標 － －	1. 校内の学業成績上位パーセントイル順 2. 学科能力検定試験の国語の等級 3. 学科能力検定試験の英語の等級 4. 学科能力検定試験の社会の等級 5. 学科能力検定試験の数学の等級 6. 学科能力検定試験の自然の等級 7. 国語の校内成績が上位パーセントイルに入る
学群分類	第1類学群			
募集定員	7			
可能志願数	8			
特別募集定員	無			
追加志願数	－			
備考	本学科ウェブサイト： http://www.ed.ntnu.edu.tw 連絡先電話番号：(02) 7734-3880			

志願学科数は学群の規定による。繁星入学では学科専攻ごとに以下の8つの学群に分けて学生募集をしている。

- 第1群：文・法・商・社会科学，教育，管理学科
- 第2群：理・工学科
- 第3群：医・生命科学・農学科（医学科以外）
- 第4群：音楽関連学科
- 第5群：美術関連学科
- 第6群：舞踏関連学科
- 第7群：体育関連学科
- 第8群：医学科

出願条件は，高級中学の全課程を同一の学校で学び，高級中学1年，2年の各学期を履修した当該年度の卒業生であること，かつ，高級中学1年，2年の学業成績総平均が大学が定める上位パーセントイルに入っていること，となっている。たとえば，台湾大学及び台湾師範大学は上位20%，東呉大学は上位40%となっている。

繁星推薦入学での受験を希望する受験生は，1月下旬～2月上旬に大学入試センターが実施する学科能力検定試験に参加しなければならない。一部の学部・学科では技能試験も課している。一次選考を通過した者が，二次選考に進むことができる。一次選考通過者数は各大学・学科が決めるが，学群によっては定員の3倍又は50人までといった規定がある。募集単位による個別試験は行わず（第8群は面接を実施），大学独自選抜委員会は各大学が定めた配分順序にしたがって合格者を配分し，各大学が合格通知を受験生に発送する。

配分順序は，第1順序は学校の学業成績の上位パーセントイル，第2～第7順序は学科能力検定試験の各科目の等級及び総等級，各科目の学業成績の総平均成績の順位，技能試験の成績，などである。第1回目の配分においては，同一高級中学で1名のみ配分する。合格者は当該年度の個人申請入学に出願することはできない。また，合格を辞退しなければ，当該年度の試験配分入学に参加することができないといった制限がある。第1回目の配分で欠員が出た場合，学科の配分順序項目に従って2回目の配分を実施している。表6は，繁星推薦入学の募集内容の例である。

(ii) 個人申請入学

個人申請入学とは，大学が適性に従って人材を選抜し，学生が適性に従って大学・学科を選ぶというものである。出願資格は，当該年度の学科能力検定試験，術科試験の成績が大学・学科の検定基準を超えていれば，希望する大学・学科に出願できる。受験生1人につき，6大学・学科まで出願可能である。

選抜は二段階方式である。第一段階は学科能力検定試験の成績に基づきふるい分けを行い，第二段階において，面接試験，筆記試験，資料審査，実技等，多元的な方法で選抜をする。一次選考では，大学独自選抜委員会が統一的に処理し，一次試験通過の等級資料を公表する。二次選考では，各大学・学科が個別試験内容を定め，4月に個別試験を実施する。合格候補者がリストアップされた後，各大学・学科の合格者・補欠合格者は大学独自選抜委員会のサイトに志願順序を登録する。その後，大学独自選抜委員会が統一配分を行い，各合格者は1大学・学科に配分する。表7は，個

表7：個人申請入学の募集内容（国立台湾師範大学，2014年，一部）

国立台湾師範大学 教育学科		学科能力検定試験による篩い分け			大学独自選抜総合成績採点方法及び総合成績に占める比率				大学独自選抜総合成績同点時の 優先項目		
		第1段階			第2段階						
		科目	検定基準	篩い分けの倍率	学科能力検定試験算出方式	総合成績に占める割合	指定項目	検定		総合成績に占める割合	
大学・学科番号	002012	国語 英語 数学 社会 自然 総等級	前標	3	1.00	50%	審査資料 面接	-	20%	1. 学科能力試験 2. 面接 3. 審査資料	
募集定員	24		前標	6	1.00			-	30%		
性別要求	無		均標	-	1.00						
選抜対象予定人数	60		均標	8	1.00						
原住民特別募集定員	2		均標	-	-						
離島特別募集定員	無		-	-	-						
指定項目試験選抜費	1200	指定項目内容	項目：高級中学（高級職業中学）の成績証明，自伝（学生自身による説明），学習計画（申請動機を含む），クラブ活動証明，クラス幹部証明 説明：原住民の受験生は本人の戸籍簿の写し（或は戸籍謄本）を提出しなければならない。（以下略）								
指定項目選抜試験に関する通知	2014年3.21		試験説明	1. 大学独自による選抜試験の項目は，面接及び審査資料に分けられる。 2. 面接内容はキャリアプランニング，教育に対する基本的な認識及び知識を含む。審査資料も参考にする。 3. 面接試験は2014年3月29日（土），詳細な面接時間表（試験の順番及び時間）は遅くとも3月28日正午以前に本学科のウェブサイトで公開する。各自確認するように。							
提出資料受付締切	3.25										
指定項目選抜試験日	3.29										
公示	4.11										
選抜試験総合成績再審査締切	4.17										
離島特別募集定員における地域別の制限	（無）										
備考	1. 第1段階通過者は3月21日9時以降に本校の教務処のサイトで諸規定を確認し，指定項目試験に係る費用を納入後，3月25日までに第2段階の指定項目を伝え，審査資料を提出しなければならない。 2. 本学科ウェブサイト： http://www.ed.ntnu.edu.tw 連絡先電話番号：(02) 7734-3880										

表8：試験配分入学の例（国立台湾大学 2014年度，一部）

学科	学科能力検定試験 検定項目及び基準	指定科目試験 採点科目及び方法	同点時の優先項目		選んだ学科の説明
			1	2	
中国文学科	-	国語 ×1.50 英語 ×1.25 数学乙 ×1.00 歴史 ×1.25 地理 ×1.00	1	国語	
			2	英語	
			3	歴史	
経済学科	社会（均標） 自然（均標）	国語 ×1.50 英語 ×1.50 数学乙 ×2.00	1	数学乙	
			2	英語	
			3	国語	

人申請入学の募集内容である。

(iii) 試験配分入学

試験配分入学とは毎年7月に行われる指定科目試験の成績によって志望大学に配分される選抜方式である（台湾の学年始期は8月，実際の授業は9月開始）。一部の大学・学科では，学科能力検定試験や技能試験を課すこともあるが，それは各募集単位で決定する。筆記試験成績による客観性，公平公正という入試もまたここで維持されている。

出願資格は，公私立高級中学（職業学校）卒業生又は同等の学力を持つ者で，当該年度の指定科目試験又

は学科能力検定試験，術科試験の成績によって試験配分入学試験に出願できる。出願方式は一律にネット登録で行われ，各受験生は100大学・学科まで出願可能である。実際は，一人平均50校程度出願している，という⁹⁾。大学は受験科目を3～6科目まで指定し，点数について重みづけ（1.00, 1.25, 1.50, 1.75, 2.00で重みづけ）をする。大学入試センターが同試験を実施し，大学試験配分入学配分委員会が各大学・学科の募集要件，第1に資格基準，第2に成績の配分比率，同点時の優先項目の順序に基づき配分する。各大学による個別試験は行われぬ。表8は，試験配分入学における募集要項の例である。

2. 近年の入試改革の特徴

(1) 入学試験機会の複数化の推進

これまで述べてきたように、およそ半世紀続いた連合試験が廃止され、2002年より多元入学方式が導入された。これにより、従来一回の試験のみで大学進学先が決定されていた状況が改められ、個人申請入学や繁星推薦入学といった新たな大学入学ルートを取り入れ、受験生に受験機会を複数回提供することで、学生が能力や適性にあった進学先が選択できるようになった。表9は近年の大学合格者における入学ルートごとの割合を示したものである。学校推薦開始当初の2007年を見ると、試験配分入学が大学入学ルートの主流であったが（全体の7割）、2012年になると半数以下の48%にまで減少している。一方、個人申請入学の伸びが顕著にみられる。2012年の場合、繁星推薦入学と個人申請入学の数値の合計で47%となり、試験配分入学とほぼ同じである。ここからも、台湾の大学入試において試験機会の多様化は進んでいることがわかる。

(2) 大学独自選抜における募集定員数の拡大傾向

入試の多様化が進む中で、近年最も募集定員が拡大しているのが大学独自選抜の個人申請入学である。表10は入試形態ごとの募集定員数と割合である。表11は東呉大学における募集定員数の割合の推移を示したものである。

個人申請入学は、国公立を問わず、いずれの大学でも募集定員枠が年々増加傾向にある。各大学で募集定員を増加している理由には、筆記試験だけの学力だけでなく学生に創造的な能力を学生に求めていることや、少子化を背景として学生の早期に確保したいという意図がある¹⁰⁾。なお、個人申請入学・繁星推薦入学

による入学者が全体の約半数を占めるまでに拡大している受験生に対して二次選考を行う各大学・学科の業務の負担増が予想される。しかし、現地訪問先での担当者の説明では、個人申請入学で入学する学生は専門領域への興味や適性が高く、入学後の成績も良好なため、たとえ受験生増加に伴って入試業務が増えたとしても大学・学科のレベル向上には有益であることから、教員はそれほど負担を感じていない、とのことであった¹¹⁾。

大学独自選抜のうち、繁星推薦入学の募集定員枠について台湾教育部は、国立大学は募集定員の10%以上、私立大学は逆に5%以内と規定している。ただし、「国際一流大学及び先端研究センター発展計画」や「大学教育卓越奨励計画」といった世界レベルでのトップ大学づくり計画に採択されている私立大学は国立大学に準じることとしている。多くの受験生の入学機会を確保するため、繁星推薦入学合格者は当該年度の個人申請入学試験に出願することができず、また、合格を辞退しないかぎり、当該年度の試験配分入学にも出願できないといった制限も設けている。繁星計画が導入された当初は個人申請への出願も認められていた。だが、繁星計画と個人申請の両方に合格した者のうち繁星計画で合格した大学を辞退する者が多く、結果、定員割れが生じたため（小川・南部2008）、制限が設けられた。台湾教育部によれば、2011年にそれまで別々に実施されていた繁星計画と学校推薦を統合して「繁星推薦」と変更し、募集単位である各大学・学科での個別試験を廃止したことも、繁星推薦における入学者を拡大し、高級中学の均質化、地域の均衡化といった多元入学の精神を実現することがねらいにある¹²⁾。

表9：大学合格者における入学ルートごとの割合（%）

	学校・繁星推薦	個人申請	試験配分入学	その他
2007年	7	14	73	5
2008年	8	17	71	4
2009年	8	17	69	6
2010年	9	21	63	8
2011年	6	30	59	5
2012年	9	38	48	5

注：学校推薦は2011年に繁星計画と統合して繁星推薦と名称変更された。「その他」は各大学独自の募集。出典：台湾教育部『中華民国教育統計 民国103（2014）版』42頁をもとに筆者作成。

表10：入試形態ごとの募集定員数と割合

	繁星推薦 (%)	個人申請 (%)	試験配分入学 (%)	その他 (%)
2012年	8,575人 (7.52%)	42,212人 (37.01%)	52,674人 (46.18%)	10,591人 (9.29%)
2013年	10,246人 (8.64%)	46,887人 (39.55%)	46,578人 (39.29%)	14,848人 (12.25%)

出典：大学甄選入学委員会「繁星推薦」「個人申請」，大学入試センター提供資料に基づき筆者作成。

表11：東呉大学における募集定員数の割合の推移

	繁星推薦入学	個人申請入学	試験配分入学
2012年度	5.53%	21.26%	72.84%
2013年度	6.60%	31.06%	61.97%
2014年度	8.47%	36.40%	54.75%

(3) 学生募集及び入学試験調整研究プランの実施

2014年8月より台湾では後期中等教育段階の無償化がスタートしたことは先の述べたとおりである。この改革のねらいは、小学校から高級中学段階までの12年間を国民基礎教育（原語・国民基本教育）と位置づけ、児童生徒の多面的な能力や多方面の興味・発展の育成の重視にある。2018年には高級中学の教育課程基準も変更される予定である。こうした動きを受け、従来の学生募集・試験制度の在り方についても調整が進められている。この調整は「学生募集及び入学試験調整研究プラン」(原語・「大学招生及入学考試調整研究方案」と呼ばれ、現在、教育部から委託を受けた大学学生募集委員会連合会と大学入試センターが調整に向けて検討を行っている。大学多元入学制度の成果を検証し、現行の制度を調整することで、大学における人材選抜の多様化、高級中学教育の正常化、生徒の学習のトータル化（原語・「学生學習完整化」）を目指している。調整は第1段階（2015年～）、第2段階（2017年～）、第3段階（2021年～）で行われることが計画されており、とくに第3段階では、個人申請入学を大学入学者選抜の主要なルートとし、試験配分入学は次第に廃止する方向で検討を進められている。2014年時点では調整プランの草案が提出されているのみで、最終的なプランは2015年に公表予定である。草案段階の調整プランの主な内容を以下に示しておく¹³⁾。

第1段階（2015～）：

▽指定科目試験を現行の3～6科目から3～5科目に削減。

第2段階（2017～）：

▽学科能力検定試験の国語・英語の試験範囲を高級中学2年までから、高級中学3年前期までに拡大。

第3段階（2021～）：

▽学科能力検定試験と指定科目試験を統合して新しい学科能力検定試験の実施。一つの教科の中に基礎的内容と発展的内容を盛り込んだトピック問題を課すなどして総合的な試験を作成予定。出題範囲は5科目・高級中学3年前期まで。

▽各高級中学の成績を共通のデータベースで管理。

▽個人申請入学を主要な入学者選抜ルートとし、試験配分入学は補助的に活用、次第に廃止。

▽繁星推薦入学の募集定員枠の現行10%から15%に引き上げ¹⁴⁾、など。

3. 考察—学力保証の観点から

これまで1回の統一的な試験の成績のみで選抜されていた入試制度を改め、入学者選抜の多様化を実施、推進している台湾の大学入試の概要と改革の方向について確認してきた。こうした動向について、改めて本論の課題である学力保証の観点から考察を試みたい。

(1) 独自選抜入学における学力保証メカニズム

すでにみたように繁星推薦入学、個人申請入学および試験配分入学という選抜区分は、それぞれ明確な意図を持っている。すなわち、繁星推薦入学は「弱者救済と地域均衡」、個人申請入学は「適性を重視した生徒および大学の相互選択」、試験配分入学は「筆記試験による客観性、公平公正の確保」というものである。

「はじめに」で述べたようにAO入試や推薦入試が学力不問入試として問題となっている我が国の事情からすると、入学後の学業成績は試験配分入学の学生が最も高く、推薦入試である繁星推薦入学やAO入試である個人申請入学の学生の学業成績はさほど振るわないと予想される。ところが、実際はその逆になっている。

台湾では、各大学が入学後の学生の学習状況について、選抜区分ごとに追跡調査を行っている。その結果によれば、個人申請入学および繁星推薦入学で入学した学生のほうが、試験配分入学で入学した学生よりも成績がよい、という評価がほとんどの大学で聞かれる（国立台湾大学、国立台湾師範大学、東呉大学、淡江大学）。台湾教育部も同様の認識を有している¹⁵⁾。台湾教育部は各大学から提出される追跡調査の結果を踏まえて毎年度の募集定員を確定しており、教育部としても、大学のレベルアップのためには繁星推薦入学および個人申請入学の募集定員枠を今後も拡大したいという意向である。

なぜこのような結果となっているのか。それは、繁星推薦入学や個人申請入学の選抜過程に学力保証のメカニズムが組み込まれているからである。

①学科能力検定試験の受験義務

繁星推薦入学、個人申請入学いずれにおいても、出願資格において募集単位である大学・学科が定めた基準を超えていることが必要になっている。その基準は主として、高級中学2年までに学んだ必修科目5科目の基本的な学力を測定する学科能力検定試験の成績である。各大学・学科はこの共通試験の総合成績および指定する各科目成績について基準を設け、これをクリアした受験者に対し各大学の個別選考に入る。

②高級中学成績による選抜（繁星推薦入学）

繁星推薦入学では、学科能力検定試験の基準を満たした受験者をそれぞれ大学が定めた基準によって選抜するが、その基準は主として高級中学の成績による。校内の相対順位、すなわち上位何パーセントイルに入るかという指標によって、より高い成績順位の者から合格とする。上位1パーセントイルに入る生徒は上位2パーセントイルに入る生徒より先に合格となる。学校間格差という要素もあり、必ずしも厳密な比較にはならないが、それでも高級中学でより優秀な成績を取

めた生徒がこれによって獲得できる。私立大学の東呉大学や淡江大学では、この繁星推薦入学による学生が3区分の中で最もよい学業成績を収めている。

③個別の大学・学科選考における筆記試験、口述試験（個人申請入学）

試験に対する社会的関心、言い換えれば監視が厳しい台湾では試験の透明性に高い配慮が払われている。その一つの表れとして各選抜区分の選抜方法・内容や評価基準を詳細に掲載した要項が毎年編集、配付される。個人申請入学についての要項をみると、表7で引用したように、各大学・学科ごとに出願基準としての学科能力検定試験の成績基準とともに、個別選考における具体的な試験方法・内容・配点が記載されている。

個人申請入学の個別選考においては、書類審査、面接試験、筆記試験などが大学・学科それぞれの判断で取り入れられている。筆記試験を課す学科は各学科に特化した教科目を課すことが多い。すべての学科で筆記試験が課されるわけではないが、これを課す学科は少なくない。面接試験もたんに志望動機や興味関心を尋ねるだけでなく、学科に関連した専門的な知識を問う口述試験も少なくない。したがって、目的が「適性による相互選択」でありながら、その適性の要素として個別選考においても学力がかなりの比重で評価対象になっているといえよう。

（2）学力保証の不安要素

しかし、大学独自選抜入学が学力保証に万全を期しているわけではなく、不安要素も抱えている。

第一は、繁星推薦入学について、大学個別の選考過程がなく、学校間格差を残したままではほぼ高級中学の成績のみで合格者を決定していることである。それまでの繁星計画と独自選抜入学の学校推薦を統合して繁星推薦入学となる2011年以前では、学校推薦入学においては各大学・学科が面接や筆記試験、書類審査といった個人申請入学と同様の大学個別選考を行っていた。

上述したようにこうした個別選考には大学・学科への適性・興味関心を見ると同時に、学力審査の要素が多分に含まれている。2011年以降、統合された繁星推薦入学においては高級中学からの推薦とその成績を選抜において最も重視するようになり、これにより個別選

考はなくなった。このため地域や学校によっては上位成績であっても必ずしも学力優秀な学生が合格するとは限らない状況が生まれた。このことは台湾大学のような難関大学で繁星推薦入学の学生が入学後成績が最も振るわず、定員拡大に消極的な姿勢となって現れている。高校の平準化を狙って全国の高校から1～2名を推薦させ、面接と書類で選抜する「地域均衡選抜」を2000年代初めに開始した韓国ソウル大学が、現在では定員拡大に積極でなくなったことを想起させる(朴・石井2013)。

第二は、繁星推薦入学と個人申請入学の大学独自選抜入学の出願要件となる共通試験である学科能力検定試験についてである。この試験の出題範囲は高級中学2年までであり、独自選抜で早期に合格が決定してしまえば、それ以後の学習に実が入らなくなるという問題が指摘されている¹⁶⁾。高級中学3年次の学習に対する意欲が低下することで、大学に接続する学力が十分習得できないのではないかとこの危惧がある。この早期合格者の学習意欲低下はまた他の生徒にも影響し、高級中学教育全体にも混乱をもたらす。このため学科能力検定試験の出題範囲を高級中学3年の前期まで延ばそうという案が検討されていることは前述の通りである。

(3) 思考力・学習意欲を含む「学力」評価への展望

大学独自選抜入学の学生が入学後試験配分入学の学生より優れた学業成績を上げているという事実は、たんに上述したような学力保証の要素を含む選抜方式によって優秀な学生を早期に獲得できているという理由からだけではないであろう。とくに大学の個別選考のある個人申請入学(およびかつての学校推薦入学)では、当該学科・専攻分野に対する生徒の興味関心や思考力といった適性が求められ、判定されていることが、入学後学習意欲を維持し、勉学に取り組んでいることと大きく関わっていると思われる。高級中学までに培った「基礎的な知識・技能」に加えて、思考力や学習意欲が大学での学びへのスムーズな接続に大きな効果をもたらしている。こうした判断が、前述したように、将来的な入試改革において個人申請入学を主要な入学者選抜ルートとしていくという構想につながって

いるのではないか。

このように「基礎的知識・技能+思考力+学習意欲(興味関心)」を入学者に総合的にもとめる考え方は、「はじめに」で述べた我が国中央教育審議会の2014年高大接続答申が提起した、学力3要素に基づいた「多面的・総合的評価」を行う入試への転換構想とまったく方向を同じくしている。台湾の学科能力検定試験において、従来の選択式問題から記述式問題や総合問題を取り入れる方針も、「大学入学希望者学力評価テスト(仮)」で合教科・科目型や総合型問題を導入し、思考力を評価する試験とする中教審構想とも共通している。

奇しくもここに来て入学者に求める資質・能力について、台湾と我が国は同じ方向を向いたといえる。とはいえ、我が国でも新試験の技術的な問題や大学における個別選抜の抜本改革への体制整備に対する不安は小さくない。台湾でもこうした問題は共通しているであろうし、これらの問題をどう克服しながら改革を進めていくのかは、我が国の大学入学者選抜にとって切実な共有の問題となっていくはずである。

おわりにー我が国への示唆ー

以上、台湾では大学が独自に展開する繁星推薦入学や個人申請入学において、学科能力検定試験その他のメカニズムを備えていることによって、我が国の推薦入試やAO入試と異なり、大学教育に求められる基礎学力を担保する一定の成果を収めていることを確認した。このことによって入学者選抜試験において受験生の学力問題についての議論は现阶段ではあまりみられない。

我が国でも学力不問への批判からAO入試や推薦入試に利用できる共通試験の創設がこれまでもいく度か議論され、「高大接続テスト(仮称)」(中教審2008年答申)や「高等学校基礎学力テスト(仮称)」(中教審2014年答申)などが検討、提起されたが、いまだ実現には至っていない。台湾の学科能力検定試験の経験はこのテスト設計に参考になるのではないか。また、独自選抜入学における個別大学の筆記試験や学力を問う面接試験(口述試験)についても、議論はありながら労力や日程など様々な理由から一部大学のみ導入に

とどまっていた我が国大学にとっても、広く実施している台湾の実例から何かしかの検討材料が与えられるのではないか。

ただし、台湾でも学力問題が顕在化していないといっても問題なしとしているわけではない。出願要件となる学科能力検定試験の手直しを検討しているし、さらにはいままでように受験生に求める資質・能力を幅広く捉え、我が国の学力3要素と同じ内容の資質・能力を測る選抜制度への改革を構想している。我が国では少子化による大学全入化の進展からこの10年あまり受験競争の過熱は沈静化してきたが、大学入試への社会的関心は依然高い。大学教育のユニバーサル化、あるいは大学を巡るグローバル化、競争時代といったこれら共通の背景を抱えながら、台湾の大学入試はどのように変わっていくのか。現行の独自選抜入学の在り方だけでなく、今後の入試改革についても台湾を注視していく必要はますます強くなっていくのではないか。

参考文献

1. 南部広孝「台湾の大学入学者選抜における「繁星計画」の導入と展開」広島大学高等教育研究開発センター編『大学論集』39号、2008年、129～144頁
2. 杉原敏彦・永田純一「台湾における入学者選抜制度多様化の現状－繁星計画の動向と進路指導」広島大学高等教育研究開発センター編『大学論集』40号、2009年、301～312頁
3. 小川佳万・南部広孝編『台湾の高等教育－現状と改革動向－』、広島大学高等教育叢書95、2008年。
4. 『東アジア諸国における大学入試多様化に関する研究』研究成果報告書（日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（C）課題番号17530548研究代表者・石井光夫、2008年。
5. 朴賢淑・石井光夫「韓国の大学入試改革と学力保証」『東北大学高等教育開発推進センター紀要』第8号、2013年3月。

注

- 1) 台湾教育部「高級中等教育法」（2013年7月公布）、台湾教育部十二年国民基本教育ウェブサイト「十二年国民基本教育実施計画」<http://12basic.edu.tw/Detail>

[php?LevelNo=8](http://www.caac.edu.tw/levelNo=8)（2014年1月4日）。

- 2) 大学考試中心『大学入試制度建議書－大学多元入学方案』1992年。
- 3) 以下の内容は、大学入試考試中心編『103学年度学科能力測驗簡章』に基づく。
- 4) 以下の内容は、大学入試考試中心編『103学年度指定科目測驗簡章』に基づく。
- 5) 以下の内容は、大学入試考試中心編『103学年度高中英語聽力測驗簡章』に基づく。国際化への動きに向け、同試験は2011年から試行され、2012年正式実施された。2015年から試験実施時期を10月と翌2月に変更し、各選抜ルートでも検定基準として用いるようにするなど、英語ヒアリング試験の成績は大学入試にとって不可欠な材料として位置づけられている。
- 6) 以下の内容は、大学招生委員會連合会「大学考試入学分發招生規定」（2012年8月）、大学招生委員會連合会「大学繁星推薦入学招生規定」（2013年9月）、大学招生委員會連合会「大学個人申請入学招生規定」（2013年9月）に基づく。
- 7) 大学甄選入学委員會「繁星推薦」<https://www.caac.edu.tw/>（2015年1月5日）
- 8) 大学入試センターでのインタビューによる（2014年3月10日）。
- 9) 台湾教育部でのインタビューによる（2014年3月10日）。
- 10) 大学入試センターでのインタビューによる（2014年3月10日）。
- 11) 台湾師範大学及び淡江大学でのインタビュー等による（2014年3月11日及び12日）。現在、書類審査のための書類はすべて電子化されているため、入試業務の負担は軽減されている、という。
- 12) 台湾教育部でのインタビューによる（2014年3月10日）。
- 13) 草案段階の調整プランの内容は「大学招生及入学考試調整研究方案 公聽會資料」（2013年）、大学入試センター及び台湾師範大学でのインタビューによる（2014年3月10日及び11日）。
- 14) 繁星推薦入学の募集定員については、現在、当該校の当該年度募集定員の15%を超えないことといった規定がある。大学招生委員會連合会「大学繁星推薦入学

招生規定」(2014年10月)の7を参考.

- 15) 台湾教育部でのインタビューによる(2014年3月10日).
- 16) 大学入試センターでのインタビューによる(2014年3月10日).